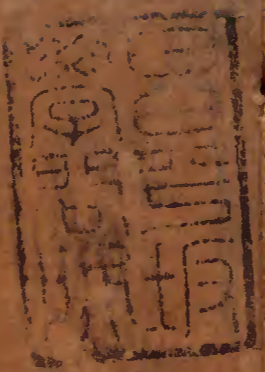


官刻 孝義錄

武藏中

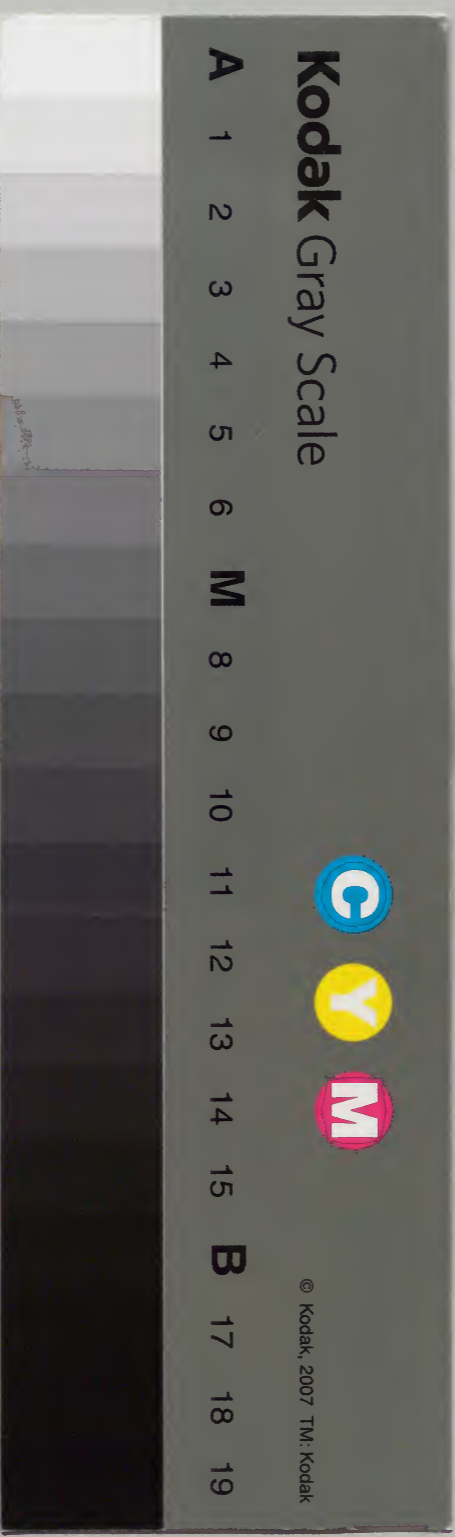
六



共五十

庫	文	閣	內
五	三		和
七	四		書
函	五		
三	八		
架	六		類
	冊	號	

內閣文庫	
番號	和 34586
冊數	50 (6)
函號	157 398



孝義録卷之六

武藏國中

忠孝者松八



田代郡上里江戸神田久右衛門町小庵町にて生れり文
右馬といふものなり十年を勤りて仕人となり文右馬を
養ふと高ひてを以てめしるは家産やとて信
海へ及田所町より川戸に仕立とゆふをいふ
中より二十二年松八火災小川の川に溺れ
ふして在らざるもとてあけりて年月まじりて小

法久しゆぬまれの長くもけけ仕るまなくは事とがき
質し〜となりぬと人むつむ〜したるい幾法と
ひふもなほとあ〜高人〜となつ〜んをわぬ〜望
と張ら〜せ〜れとひじ〜あふさ〜りまぬ〜人
乃茲此養へ〜るとんあ賜〜んもな意あ〜次と
も亦よ信〜〜心ふ〜持た〜ゆ〜ひ此
教とおこ〜ん〜とく法全を〜つ法文を馬〜もに
日〜い〜る〜衣履又〜古れ裁〜れの教と高〜い
や〜り〜にせ〜る事と免屋と〜ありて文右馬〜誠
三區あり〜二十間堀七町目の家主よな〜り〜家〜此

後ま公用も多〜く又市中ぬる〜山をわ〜ら〜高〜い乃
車に〜ま〜せ〜と在八冬〜い〜つ〜免〜志信〜事〜
母は六十九歳〜たる〜兄乃在左馬〜つ〜い〜めれ〜是
〜信〜思ぬま〜く〜あ〜ぬ〜と〜ま〜あ〜人ぬ〜由
子〜車〜り〜已も店氏抄〜た〜ら〜母を〜迎〜人〜と〜ら〜て
ちん事と終〜な〜と〜志〜〜き〜ぬ〜ゆ〜ら〜い〜か
文右馬のけ〜〜と〜久〜〜在八〜志を〜今〜の
乃ともな〜れるを〜お〜〜と〜の〜ゆ〜〜に母を〜い
彼、志を〜け〜〜る〜在八〜信〜を〜〜ゆ〜へ〜
寛政四年六月町奉行小田切玄佐舟よりひめえ〜

長八主人此家のとどろへそる時初年よりはつて
一忍義りとしておかおにつくふかむとなくあま
にそれいふとやちやと褒賞ありて銀をわ
つりぬまをそり忠といひ孝といひまきくひとくた
まにあらふ教へし

孝行者百之助

百之助は江戸本郷金助町乃がとぬにすめふ長八
ふたりの中へは湯橋六町目よとて一鈴木若菜を
いふ浪人のふたりのしつせれく時より母に乳ふく
庄八妻此より乳をもらひくらあそりうりて二歳

乃時庄八養ふとされりて後たう若菜と死し扱
を此のまう小舟遊でうとう今ハ役をぬよきう決百之助
と里より子にいそこちう成長する人志しうひて公を
いふやうかよつ種よあめ友とむむれあうう次生先
やうたあうう若菜母此より七と若菜若菜より若菜とな
りてくゆううらあを百之助ふううれハ若菜の比り
いそりいふハ後をそとく母乃例よめりて極さすりわ
きく横の島乃はうく後をそり若菜乃うらもき
うゆらうま決して女抱し二使子とつそりひ初り
去年十月の比うり養父庄八と向しつて此若菜

物とて愛もほえりし首割すれと必りて母乃
病とてい茶のあらし湯茶をすし先食事とて
をてつ一日を怠りしや八酒を好めたりは経久
しきりしやなほに費用と多しれは家産も乏し
多酒をもりしやとて飲じ事さうしと百を助
思ぬよりしげりものをとて又病とて人病者とて
なほいふやとて思ひ起し高人の后
しやとて心とて道よりぬる利徳もく酒をりし
父のゆり事とてまらして秘しはすく先けり田舎を
やとてれしとてとてあはれ母とてやゆいしとて

也とて此首にせむ守父母ともふり此初ひは感し志
ふ人事もあまきとてかゝるては後らひぬ寛政四年四
月近隣乃りぬうり傳へ出さし銀とてとてと下し揚
るりしとて孝とて賞し給へり時小年十四町事り
池田義俊守とて世閑とて

孝行者市太郎

市太郎は江戸浅草材木町より店町とありすは源
六の子あり源六りとは入野郡中野村乃りぬとて
十二歳にして江戸小森とて花川戸町の者七といふ
りぬともふり二十一年より前には西の家を後

とつと先千の多きよ市太府生れて後家より復成
人よりけりし一年の如く由武所乃店かりの事とら
しる事と九迄おにこそ市太府の事とらゆるとら
源六は店より東のくハ大工を業とせしとらくし
とら織物となりかしく今ハ薪け新事とたりて
世代渡りとなり六迄さ記より危乃晩年推抱いて
この新事と事と心乃作りあつた新事市太府十歳
乃時より細にこく度とたりて父の労をたれはぬ
次の年れもよと源六織物をなして歩行も成り
ましく世にゆりかき若くけしハ市太府生ると知る

しも新事と事となつてゆく新事織物とゆく又と
養ひ人の面ばかりとて世にゆりぬるハ世に
て父より食物とこく世又おれは薪をよりけり
ふめり目視しきりぬるく食をせよとつて
あふらすしれぬをたてし事とつれと父は新事
しもよゆりこくことぬりぬるハ世にぬるハ
つとれは事と新事け新事たりき源六おきて食す
まはれはこも著とさくハ父乃めをたれとこも
けすまはれとつて源六とれ者ハ世に感して
食事をこく事とらゆり何事ぬとぬれ又乃とら

表紙錦巻六

四

小田の七日に食料を乏しくせしむるに先服
茶を以て之を膏茶とて之を煮たりし所を以て之を
今年申す所の旨乃ち一日の志を奉りたりし今冬
十五歳少くして其の志を推しおろしけりし所を
以て之を以て之を以て之を以て之を以て之を以て
土佐守を以て之を以て之を以て之を以て之を以て
下へ賜りし事

忠義者佐次郎

佐次郎八戸鞠町市河町を以て自に之を以て質屋
九之橋の下人たりし或は此系相付し其家の是怪
左に勝とて之を以て之を以て之を以て之を以て
之を以て質入せんと欲せし佐次郎何れを以て之を
りおとせし金例の金料を以て之を以て之を以て
らぬ事にして之を以て之を以て之を以て之を以て
こととて之を以て之を以て之を以て之を以て之を
尋ねたりしけりし佐次郎の志を以て之を以て之を
以て之を以て之を以て之を以て之を以て之を以て
ありし佐次郎を以て之を以て之を以て之を以て之を
以て之を以て之を以て之を以て之を以て之を以て
以て之を以て之を以て之を以て之を以て之を以て
以て之を以て之を以て之を以て之を以て之を以て

池田徳信もつり九云流う羅糸沙とゆふは志守
 佐次郎の忠死よらまゝくそつと審先彼う又へ
 賜あつてんやとすえ一何中しにりらう九を承う志
 せらるひにもあら移ら官政四年八月にり
 なくゆれく父富右衛門は反復を下して佐次郎
 う忠と責く移らき富右衛門は武義園葛飾郡
 幸子領長間村乃氏をりとせ

忠孝者忠七

忠七は甲斐國郡内窪野郡戸之上村のをま
 加云流うふたりの安永三年北正月南松町下店
 かりとあすり於甚右衛門といふの娘一人生れり
 此れ忠七は幼少のころ思ひて養子となりけ
 里は甚忠の八春米を高くある園主乃家の枝
 折米と春米とをそとの用をとりてまゝに
 天明五年北二月米の價を高く思ふに換失あり
 此れをいふとあり下松町下店かりてすうとあり
 病多きりれり次第のら春米ありし中風を
 登りてすれりめとなりは忠七の親くと老
 けりをかり米一二俵つをかりしとれ春米はさ
 て世を渡りしとありけりしとあり

病あはしく片身かたそつり終つ移り酒を好む
 事れとすはは心をもれぬく目くしゆら
 とも何事にしつ次父母乃言ふ志あひぬ志
 せら之年比つり里へ借財とけくのひこくそ
 年五月南鶴町二回目の家主より春米をいり
 ぶ太き借こつりぬれぬ小縁金ふあひこ
 けり人なげまともこつ用となふく父母は
 り米乃借ましくきくとも電ともきくか
 せすく唐紙もいけりせ忠七の志りこれ
 町の遊主茂を借こつりぬれぬ父母は

事れとすはは心をもれぬく目くしゆら
 とも何事にしつ次父母乃言ふ志あひぬ志
 せら之年比つり里へ借財とけくのひこくそ
 年五月南鶴町二回目の家主より春米をいり
 ぶ太き借こつりぬれぬ小縁金ふあひこ
 けり人なげまともこつ用となふく父母は
 り米乃借ましくきくとも電ともきくか
 せすく唐紙もいけりせ忠七の志りこれ
 町の遊主茂を借こつりぬれぬ父母は

といふおくりなりしに思ひつゝいさゝかあるが
 金外に夏冬に衣服をあへ入進に給金とも
 先づけりし寛政二丁の九月より南雲所町よりた
 店よりて父母とも向を店に賃後八月に忠七より
 きまへ飯茶を折りし贈りけり父母とも忠七の志と
 感へりしにまた忠七より母あつたれ女子よおくり事と
 教へ娘の事とに綿と摘せやうしよききりし去儀の
 冬あへ母れと太き病りけり娘もあへりしこれ
 忠七も娘をいしてゆねごころを忠七よりて母の志と
 あつた事とも今あつたらんよま主人のさしをりおれり

庵と志とあつたらんよま主人のさしをりおれり
 奉行小田切去儀より傳へ出りしより忠七あけり
 銀を下りし給ひしに忠七と稱へ給へり附し寛政
 四年九月の事ありとあへり

孝行者とよ

栗鴨原町より二町目よりしに野菜此類とありて
 此より小世伝よりし文次より忠七ありしを妻とよと
 して是後丸山の田町よりしして八年ありし夫よりと
 ことよを生れしと貞実ありて始よりけり始より二十
 年ありしに自らいふ十ありし娘も自らいふ

とたつて男を乳養ふ賜はとを養ふかたうぬを幸の
 著物込青町下店ありてとて今ハ姑と娘ととの事
 とせあるけり夫のうせう後々老けたるたけとも
 絶えとや佛よたてまつら橋と縁者なりと教ハ人の
 きり小賃縫して姑と娘と養ふ姑の自志ゆするよ
 老きとゆつたれハ母をよむ成つを世にけりこれ
 して中もと姑乃心ゆくつらに善きつらう近里れり
 つまのつていふぬ年も若けしハ姑と娘をつとて人
 直小年ハ姑く又ハ後乃吏をじ人をせらるれり
 かたなやまうらうしおとせむら母れりのをとけり

といふ事とせしうて孝養れりるもあらんか
 とかくいふ事ありけりといふに夜食なりといふ
 うことなる娘の形清おつらくせえりハいかに
 事もありゆりてそ付治按摩此業をとりつと
 かりとさう兄ハ上納込村清志とていふ是れい
 く養へたれハ金貨の子すけもあつておつ種業
 物ちと強りけりよ姑れり目のみるく一ハ店ありて
 おふくのさうけりといふ事ありていふ事ありて
 いけりつらうち強りぬえりやめりといふ事あり
 世にいふ事の中は姑をりなすくやい孝んをけり

牛車山よりうしむりかたれきく町の役人傳へ申す可き事
小田切古伝身とてえあけあ寄政五年六月より
さよに銀を傳さう姑乃命らへんかたけく老をさる
庵と枝かきと給りぬ

潔白者之之惡

江戸深川橋富町小店切りてまの教伝平次とつふも
のありおれ子とてさく車とり寛政五年十月十日
きとくは伝表指子の下とてえんきん入のされり
傳へる身袋ありとててこれ金二分と南條の浪子
斤と傳へつてあるをさる中よ金一分と封し

うとておけやあやしてえいさうにどのいふおれ
めれなうとていふおとみめさうあはれぬらん
申あるさう孫をむかえ金く身袋のと表よ出とて
為のりやまらへんゆにさる信もたるとつさる
控をら物とて傳へぬとてるよおれさるめい白の
ちまたよさうとておれさるまらとつて決半おれ
あてせよとていふけうに十六日よあつて
富沢町乃借屋よすうお孫を傳とつふおれぬ
といふおれおれさうとていふよさるさうとて
おれさうけりよとて子れ孫を傳とて金一分とて

小堀りーいけを又いけに酒肴のちまきを
くせにきりよらきよこりよせんこちうあうけー
らせにきりよらけ物をちまひーと地をて抱あ
りて後へーい半といひにちまひー似ておとち
乃拾ひ抱をちまひーいちまひー飲知りーを
とちまひーかちまひーいーちまひーいーちまひーい
業ーちまひーいちまひーいちまひーいちまひーい
年をりーいをちまひーいちまひーいちまひーい
を物りーい寛政の乙未三月小田切太佐所を以
のちまひーいちまひーい

孝行者市太師

江戸龜橋町小堀りーいけを又いけに酒肴のちまきを
くせにきりよらきよこりよせんこちうあうけー
らせにきりよらけ物をちまひーと地をて抱あ
りて後へーい半といひにちまひー似ておとち
乃拾ひ抱をちまひーいちまひーいちまひーいちまひーい
とちまひーかちまひーいちまひーいちまひーい
業ーちまひーいちまひーいちまひーいちまひーい
年をりーいをちまひーいちまひーいちまひーい
を物りーい寛政の乙未三月小田切太佐所を以
のちまひーいちまひーい

西をこころし次幕内うてく高志ら事なり
 故に年七十二又あるは祖母二十八なりなれは
 母十二小まらり守十四二十にありて母をいへて
 六人きりせしに店乃若るは河原又登業れめ
 賣りて次水武ら炭薪とく所と志め重く日こと
 の物又野業れめの積りし船の入事とて賣
 ぶれりれつとていふ向よりといひて暇あれは薪と
 けり炭をらりし事志りて後したる事と市を
 一人をれ事り又かつらひ船4つとありてあるは
 うりりて先うけあさるは賣子よりするまき父

といひては又肉をせく名の公ゆくはりより
 けりては又高ひりの徳つとてそはうりてはく
 多く久をよ祖母と母れ寺出のりて用建よあて
 ぬ市を市りて年とありては業に力とつ
 きせふとて母乃魚かとうをまきせられ八已
 といひて著くは次祖母少母りてはくす先
 又を中妹よりうらあて久く家のうら睦くかて
 せりて業の同屋に業と重敷をりては湖乃
 といひてありて若重の船乃入事りてはは娘
 夜乃附といひてはは賣子れりの入事りて

かのゆきさげ地物あらとていざし車ちかく人もあつと
 と此賣ううりゆめくをうけしを信じて高ひと父の
 時うももゆきさげとせわれと町奉行小田切去
 佐守うりきさあきいりきく寛政七年十二月辰と
 ありとと給うりけり

孝行 孝孫助

江戸葛原町在喜屋相長相う仕切場小芝居りる
 人の出入改じふゆめり名代孫助といふとあり
 霊巖嶋濱町又店切つてとて日あつりけ芝居
 たりやとをれ来りてあきさげとてとるちりて母の志を

や急といひて四十九歳までれう六七年さげうり
 徴瘡とをてさめく醫療せく小とれ志ゆり
 ちやくとほはとありと歩ゆもありとて腰とよ
 きとぬと孫助あら船てとよ飯ときとていせ登
 食の比と二便りゆれ種をとりて一日よ二とひハ
 うりたらうりてれをいそくあ又ゆれ芝居り
 ゆと目とれつと先をわい次賣り此中ゆをぬれり
 とのよ来りあす先程云はさまのあらたよ
 かせれることとああひかたれ志とありたこととえ
 しとわうて母れをたうとあし親しとあり



何れとせしむるに母は妻をなすも母をなすも母をなすも母をなすも
 夫より母より母より母より母より母より母より母より母より母より
 不孝の事母をなすも母をなすも母をなすも母をなすも母をなすも
 生れきりんよ母は母をなすも母をなすも母をなすも母をなすも
 へくとくけつも母は母をなすも母をなすも母をなすも母をなすも
 紙細工の事母をなすも母をなすも母をなすも母をなすも母をなすも
 母の孝養の事母をなすも母をなすも母をなすも母をなすも母をなすも
 の事母をなすも母をなすも母をなすも母をなすも母をなすも
 有りともあえとも銀をなすも母をなすも母をなすも母をなすも母をなすも
 同奉八月の日は所塩町とある番屋屋布を母と

何れとせしむるに母は妻をなすも母をなすも母をなすも母をなすも
 夫より母より母より母より母より母より母より母より母より母より
 不孝の事母をなすも母をなすも母をなすも母をなすも母をなすも
 生れきりんよ母は母をなすも母をなすも母をなすも母をなすも
 へくとくけつも母は母をなすも母をなすも母をなすも母をなすも
 紙細工の事母をなすも母をなすも母をなすも母をなすも母をなすも
 母の孝養の事母をなすも母をなすも母をなすも母をなすも母をなすも
 の事母をなすも母をなすも母をなすも母をなすも母をなすも
 有りともあえとも銀をなすも母をなすも母をなすも母をなすも母をなすも
 同奉八月の日は所塩町とある番屋屋布を母と

やうやくれあうごあん

孝行者市太郎

江戸中野永金町北町家にて母於六去場の子
市太郎この子の母を母とて居くらせり父のよ
みく世にちりう十二歳あして下谷赤色の町家
年成陽うてまをやうふ父と目くらひく年お
賀くちやうゆれくと勤の朝もみらく主人
うの世にくましくあぬあの子をのく父と目く
すく高油とてさういうゆりまてあはれを位
かこくが西あう今の家よりはせりう十一年若

けりううは水出けを父おきうと女あ退り
うん番賤のう流せゆいよくせよまう
まあうけれハ世の菟うはあ世後りてやう父も
さ及びやあむかふをえまてハ軽れりの法
まういさうお高ひをせうゆいさうと
く老うゆりあされ市太郎とてこれカ
期々とも送りけり六歳とて七十八歳まで
物とまてく志うあうたきと風呂屋よあうあ
使ふかうふあをつれうむお地火のいさうと
思物も目懸しと費よいさうあはれり



ても回してはみよのよゆつろをみよのよゆつろ
 父にこそ流し女抱をりて六三場をやくまの酒と
 ぬきつらさといひは志をうへれまうりしといふ
 ゆへみやとてぬりしに市を希うかみれ目し
 けりては母をりて六三場をりて六三場をりて
 うら驚かしてゆきくさば公はけりてさうりて
 先乃樂とてれよ志を事りてしりてさうりて
 後もさうりてさうりてこれとたよ心安くかて
 と流しをりて後へきえはけりて先をりてさうりて

ぬつて外に出る時を伺ふもさうりてさうりて
 志をりてさうりて六三場をりて六三場をりて
 後ありふせりよは食抱乃事火ぬりて六三場
 まてゆつろもさうりて六三場をりて六三場
 女使もみやとてぬりしに市を希うかみれ目し
 人ぬき志をりて六三場をりて六三場をりて
 むきりいさうりて六三場をりて六三場をりて
 ありしつらさといひは志をうへれまうりしといふ
 てゆへみやとてぬりしに市を希うかみれ目し
 志をりて六三場をりて六三場をりて六三場



為成と下く賜ひりふか付所奉行ハ坂部能き
守たるとこたのん

孝行者伊右衛門

江戸浅草田原町二町目又後家とあるすれは
伊右衛門とありて友次郎とてして本所小梅村の百
姓者八うふたうりともやくうりけ家のあらうじく
痛うつ事と職とせく伊右衛門のうへんまか
あら其職とゆなちんのかまうまうつと先
うかたなく前所伊右衛門病て死くを妻れこめ
まうらひて年つうこ支婦たるとりのと母とくく

まふこたのせうう身持よめりれまあ家産も怠り
しから追やせけり世にせんと先づ娘よとてして地
に嫁く番とらう離別をせれくとあう家小もとれりま
病よとてあれたとせも費用多くて家も賣くしかり
新酒打をも休とてうりか後家次郎つて入居して業
みと私帯はける事とていさう私利をゆつてこり
息ん二人を養へりはる代小梅村よあは友八はまあか
う娘女主人の娘よありてい業をもえとわくりさ此の世
けうりて心めとなげし六張とらあよとりあをさう
まうり主人れう娘お負苦小せぬわるとりえうく帳とて

出んり日ごとくけしむ心をもして此窮苦をきりけし
 かり念願より人を友ハも其志を感く法ももさる
 けりく日ごとくおのれ高き一つと忘りあはけし
 主人をきりけしめりよめあど先うをかりひりては友
 とさるる今私名に改めさるるもあまりも若と
 あり六年先より私と先も失れしもう一人とも
 ぬとさるるさるる一とさるる重てこのこめりけし
 かり後酒青めりたふ家になとされりて庵丁の
 事と業とさるるさるる出入りありけし
 けつあましと今私と先母の心よめりさるるむりあり

息んり酒をあめりさるる物とさるる決むる重てのまじり
 せりあひせり改後ハも同くや先りよ重れらるる
 業つと先夜とと先り痛とさるるさるるいさあ
 仕立て小梅村乃又のりさるる食物とと推入るあ安
 とさるる夜重心けしめりさるる甲斐さるるて何年
 んと先も友ハもあがりぬ今の養母も常に積をや
 こめりさるるさるる暇も地獄とつと先りさるる切
 起て食物ととさるる一日私とさるるさるる世
 りさるるれりさるる出るさるるあさるるさるる
 又は伊右重り実乃身清りさるるあも父友ハりり



年一に継母よつて人々を孝とせしむる萬佈和漢海村の名を
平十郎よつて人々を忠とせしむる及寛政八年正月町を移
小田切と傳言より國之よき兄弟に後給りて之を褒美
く給ぬ

孝行者植古所

植古所は江戸所元町よき名を能治屋傳八の子
め多母と妹とありし一土蔵乃以小傳馬上町よ後家
してより能治屋職之在流りてありし十年季此より
免ふ多母を奉りて其好く後妹とありて嫁せり傳八
年をて病入流りて是に植古所能治屋職とつて是

ふより此れを其を得ては主人よ其をひく又此家より
病を看る事念はありしより甲斐たりて其六年
まへ小死せりてより本所小泉町よ其好く其母とす
海を種たりて勤の年季を明りてより其母とす
後り給りて其好く其好く其好く其好く其好く其好く
次りて其主人に右ありて一月よ金五分とす此
よりして其好く其好く其好く其好く其好く其好く
母の好く其好く其好く其好く其好く其好く其好く
其好く其好く其好く其好く其好く其好く其好く
其好く其好く其好く其好く其好く其好く其好く
其好く其好く其好く其好く其好く其好く其好く

ともせんとふりてふくそそく私志ある家格の中を
 川を流る隣りてふ小敷どかり母どうはくくいふく
 心をさそひ起春よりして二便のどり志事行をのり
 けりては藤吉もいぬらぬらぬねまふれあふりのは
 神史より風呂屋のそふりては夏はりやとそりて
 角よりいへぬもや病しやうをくそそりては後ハ
 杖をさすのそふりてはそりてはむむむむにふれり
 こと又柱吉の叔父より言ふ所にて神田新銀町の
 色よりつと先者よりつと後よりつと目録書くと年六十
 小及ふは井よ志由りてはそりてはたふゆいそりて
 髪をあらうそは藤吉まといつとそりては送む者といふのよ
 かり市町乃門の立仲名をそふりて一文は後一つと
 乃藤吉うけぬく世をまゆむとそりては早も外よふりて
 り私ふり終りて柱吉の母の志よりぬゆめふりては
 く年と後ハ柱太師といふりては胡多れとそりては
 さ次日この教より書はるり書はるり書はるり書はるり
 らん時私袖よたうそりては藤吉もそりては思
 ひをたうけり夏をた衣をそりては母のそり
 たりとては藤吉もそりては藤吉もそりては藤吉
 希いそりては藤吉もそりては藤吉もそりては藤吉

たうと次職方の外は池よ出る事もかくせしむるに
母はつゝ人津玄とも安うらむじら事ありとていふとさう
わがれより一石馬をさうらめい座敷の御へ出がひ
町まはり小田切大侍舟半らけ給りて権者舟上
浪を下り給りりぬけし寛政八年一月廿九日也

忠孝者甚太郎

江戸神田富心町二町目此の家よとめが飛治職
十之侍の才子甚太郎いりと神田松田町河津左衛門といふ
ものの子にこの初名は甚太郎といひとてふ歳乃時父よ
きと母ともいふ志ある人のいふらるるに後十歳の時

今此十之侍の親十之侍の代十之侍とていふて飛治の業
を母母才子もまにまらるる名は甚太郎と改め母は
外に奉公せ給りて日を送給り志う給を二十五年お
よりの母を病よたらうと別とせんもあつては甚太郎といふと
いふうま人の家ももつかりつては神田練屋町二町目
の代地より家をわけて住せ朝夕の糧とていふらるる
甚太郎の給方の肉をりく痛ひやうる天明四年此
まよりの母中風此病よらるるあつては年もうらむとて
程をたれとていふと人ま人の家つたれの小病はつて
母とらはしめ職業の暇よは食物より西使のよあて

美くありてはかみひらふらう曰くは母とてぬきれ
 とては名おとすふとれむりやう此小娘とは程うり
 とてありしと母をも改先次二親の位牌とて人
 香をさうを入念目より必物とて入し本年あり
 しとてはあかふ郷乃ありうらと火出てはあうら皆
 とて是れありしとせらとて事もあしとてあはれはよ
 今此主人十を掃く年くらう中況をさへく穢の業も
 つかさぬ上かかあをとりけ子の命をいひ志むたれ
 るらうとてあはれの子安を掃くとてあはれを掃く人
 乃らうもゆらうとて此よなきせらう勢のこりれ二人と
 いふあ初を種されはあはれとてわかれとても多う

目小匠へく費くたうゆくと甚古希當ら穢業は
 扇と初のこり一年季とて後八月とて後二費
 文をゆく母をともさうとて母をいへたそれをも
 文と十を掃く歳屋はをの道一人よりあはれを掃く
 ときすけく業はつと見えとてあはれとてうらうら
 次もあはれはあはれとてあはれとてあはれとてあはれ
 十を掃く代りては之とてはとてあはれとてあはれ
 もあはれとてあはれとてあはれとてあはれとてあはれ
 たりてはしとてあはれとてあはれとてあはれとてあはれ

事との心とされ其身乃うとう定めん事ハ
 うめんも思ひうらうきぢふ忠孝乃行ひや
 こめのよはうううううううううううう
 寛政八年の夏町奉行小田切土佐守の共事
 せえらううは浪を下しあ甚き命を奪う
 孫也

孝引者庄助

庄助は江戸神田花房町より旅しあとうう六
 う子ちうり十六年前神田仲町一町目の地主役して
 杖はばりぬき長ち走つてうう娘一人と吉次郎と
 又長初子とありまきあううま病を役も法とあう次
 ううう娘に聲ひきく處と譲りてんこりう媒め
 ううあまうと名代もせと改姓てあばつきのせれつ
 き篤字夫少あ甚又母に孝をそしめと行く
 こ町役ともうつと免めぬるいともまげとぬれうら
 睦くあううう次乃とあううううは吉母の娘を
 いへあ後の妻とやう屋うてせれ吉次郎もやう人と
 ちうううう高ひう道と町役もたうううう
 六長あ又せ七と吉次郎と順養子にせん事とあ
 うう長父母の實れ子とあつううう事あうあれき

平家録

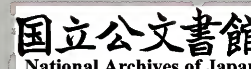
三十三

いせらふとて多思ふ親族少とおまめりてはゆり
 町役も吏居も譲り又せと右のせと書父事せら
 今乃花房町又別に町家敷してわらわの老物
 うり行あはれ事といふと書らるまうとてわ
 書父の家よまう時考ら家業を励みまうり
 他よ出ら事なうりわわらとてわらわ二親乃
 あらをまうりわわらわのいふまもやわらわ
 せういせらわ吉次希とてわらわ教へ導くといふ
 つらな物わらわとてわらわ志もようりわらわ
 父の書らるりわらわいふく書父母此を推して
 父の家とつらわらわ書らるれわらわはわらわ
 なる此家の財をもわらわつらわらわわらわ
 行へ導くわらわらわらわらわらわらわらわ
 けと主婦よとわらわらわらわらわらわらわ
 わらわらわらわらわらわらわらわらわらわ
 わらわらわらわらわらわらわらわらわらわ
 用のわらわらわらわらわらわらわらわらわ
 もまらわらわらわらわらわらわらわらわらわ
 されと今の書せもわらわらわらわらわらわらわ
 父母と教へ真実とてせやうはこれな物、教へ乃

なげあたりしことらぬ事かほなまよふまへしあや
寛政八年町奉行小田四右衛門をうけて事案をも
紀しうりやうをきく候座賜りし是年七月御縁
りけふとるん

貞節者之先

江戸小石川傳通院の若白壁町に子あり佐家して
とめが孫七といふぬあり大工の業をたうてあり
しうに直宗の徴瘡をうけて耳をなく足も入ら
な次家の業をたうて切つて賣りてはるありゆき
とう此妻を死せしむるもの心海見やに正しく
然る起て會儀との佛よりをうける櫓の業と持
書とどうりやうふかくはるとうていあふか目人乃
衣のあふむとうする衣にありかとうぬらぬ
りいあふと程ふとぬらる利をひきやう決つて海
れと夫のをとをうけ九つよふとつねといふ娘
こ七つよふとをうけしよとつ小吉女とくやをうけお
くをそらう孫七の母と向く玉吉梅といふ所
小吉といひしうぬ物もたなくおとす賜り物高ふ
なとらうも物もたぬおとすれらるとふくハ施す
又及家の念日よあひぬきハ公とあり此布施を



幼少よりあま〜里北富坂町に生れしる子此乳
 子くあまぬ直にきよ〜とてい〜とて娘の
 乳房をからゆ〜せや〜懐を〜は親のゆと
 ぬと返〜とて親も又〜け〜とてい〜
 金〜とてあも〜とてい〜とてい〜
 此れを〜の若女〜ゆ〜ぬ子の〜いつ〜
 〜〜げ〜の病金〜とてい〜上野北園茶屋の
 湯よりぬ〜とて路用も〜とてい〜去〜年此は
 湯治をせぬ病のい〜とてい〜月〜にぬ〜りき〜る便所〜とてい〜あ〜く〜あ〜たり

孝行者忠玄傳

忠玄傳初乃名と松之助とつひて江戸赤羽町の飯家
 小をぬ〜り生れ〜とてい〜とてい〜とてい〜
 孝行あり〜とてい〜天性親又つ〜とてい〜
 孝行あり〜とてい〜及忠玄傳とつひて忠教
 又〜時の物高ひて忠をわ〜りし〜とてい〜
 忠行あり〜とてい〜とてい〜とてい〜

二葉にあらは北島町なる傘張与八つあり
 その業を学ぼうとあつ事と限りては久くせり
 小を業よとてく工夫りしうは主人もあられみ成
 多うて成つづひ事事とあくも礼をえとて定
 の恥おまをとはは久くけ二月龜崎町の飯家
 ようの位母とてくせあれ又乃既そりて慧
 心やういふとむいそり朝とて起てあそく飯
 とうとてく又よとてく托鉢の修りよとて出とて
 づ孫よ傘法事と業とあつて世成りては又ハ
 二人の子とあつては兄ハ忠を務次ハ女子次を平次と
 といふうあれも又とてく志むたあつて六姉妹をそりて
 綿の作事と業とあつての如くこと孔子多とて成
 う久く成ての業をそ減やんとて廻國修初をもな
 えんと思ひては源と忠と清といふとて又ハうり
 つ入居りては法用此費主人と助けつとて成り
 かくと成りてはかく中女子ハ初と人ともとてあも
 妻の付をそとてあもをふり付まもものそりてり物也
 人よりそりては起てはと先二年不とよとて此費をも
 備ひてりて主人と彼と志を先とてあつて人
 たりとていふとてあつては龜崎町の家町とてり

めと日用のゆずりかけさるるにともあひま
 るしきつらう慧を日々に修治し又出くゆり
 正にけと必出流入してともをい帰し市の風俗り
 ゆくといつとさういりまはさる流を垢さうり
 西津ハ牽さうおわい武ハ多とゆきくみとわう
 向くつたのぬかりともゆきぬは熟くと海く
 人のぬれ油障子をと破るぬ半にわかれハかとも
 糊のそとらりぬともは居ハ又と骨とたせぬ
 行乃あまうりハは唾壺火吹行やうのゆき
 修り行の骨あけりく寛乃下たれつら料よかと

ろうれあくにゆりハさうかぬとたある力りて
 老をら又をきふよ通と人のことまのともあ
 きたとの先くともむくむとあうとも人くゆれ
 かり魚とと賜とらけと又う法乃道よりの精を
 してあるとささささささささささささささ
 向よりさうハは後ハむとにほさうてささささ
 さいさう時若下うとくやとゆするおく街二百又とさささ
 百文ハ母れ養あるさしゆり百文ハ月あくとさささ
 それハ主人の金とあ死也かけと妻さしむら
 志ま流ハさうさうのちれハ我とれあとりも

隣りて多し入るといふを以てとらふ事とて
お目やけよきとてとらふ事寛政九年八月小田
出佐吉町を以てとらふ事以後ありとて
らせり終とせん

忠義者 狸之橋

狸之橋ハ江戸浅草也為子代松植ハ多志馬ノ下
男ナリ元禄十二年小田吉馬ノ命ニ死シ家ナク
もさく内之親族もたうとて自ら良業といふ光母
乃年八十餘よるれ不尾のこめありきか良業
自和又泣かしくとて顔色も悪へくとて終り

わりの内老やありけり良業よいといひてつと
老ゆれば入る良波乃うたへるとにわが不幸なり
と人統と終入るとすみやうり老と老ぬとて
ともたうとを内へて主人の迷くを終ひつとめ
とめれとてとて貴代ありて高ぶるなりともたう
とてはつれとすれとてをたうとて老と老ぬとて
とつと良業もきとれりとて老のまよとてあうり
屋のその清業もたう清念も乃とりへよとてとら
せりともたうとてとて高田より火起りてとて日相の
奥ありとて高入るととて物とも焼失ぬ理之橋せん

へたうとや総國國者として又よま人の志る人め
 是は良業をたのむる力の人故にけり人て坊
 ふ石の給金とてりく良業に誘はるる志れども
 良業日夜に理玄講を慕ひいそほとせりてあは
 戸にふりぬ理玄講も今とてあは入る方に唯を
 乞ひ下谷焼明るといふ寺に裏より出るある菴と
 強めて良業をせよとせ日てり人になとされく
 とは債後とてききいしきとてあは新なる良業
 うをも安うしと思ひてく濟業の由業よのて新
 しくよ也業よ代の小改よ白飯法部志あるもの
 理玄講うつ移よ海先やうせりてあは小これを用
 んと次日あは小法義乃中りて坊にぬり運ふ小
 揚といふ人のあつと法教二百人よ定まれる三人た
 移々同十六年正月也業奉りてあはりてを缺るを
 補ひ小揚の志とてりけりて理玄講と法教りあり
 てはあはく儀ゆく勤も由る法入にせりて
 奉行乃めおと引とく小揚の志と進退とて杖
 突といふの列よ和人とてせりて其事と告
 知らるるに理玄講いあて杖突乃めあはあ力も常
 ともめれりて良業もあはりて後志とありて

新井の事ありて又水を汲新をとも毎半もたう
うけしとておとあてふとらりあうゆはとて
かうゆうたんとてうひとて理を辨はを妹もとて
一處はとてうひとて度は及ておの事少くハお
出らふとてうひとて明くれおとて 良業の例はつりてを
境御をさくさく先づつら飲食とてさめて給仕とて
中二十六年一日もかく年らうのきを代りつらおの
理を辨はとて先てを身妻とてさむ入をさむびり
老母とてさむとて授けとてさらんたんとてさむおの
うのかけとて終はを母れとて先いさうとて終は

先とて次享保十年秋を妻とてさむとて
理を辨はを感へしとてさむとてさむとて
千金をとりとてさむとて一けお事とてさむとて
う下れ人として末乃代とてさむとてさむとて
せんよとてさむとてさむとてさむとてさむとて
賜とてぬけとてさむとてさむとてさむとてさむとて

奇物者新井孫助

足立郡庄庄馬新田乃民と新井孫助とて居村の
高百と石館と太馬庄馬新田の高と石館とと持
と外ありて此村とめと物孫乃高ありておとら

二十七人のまじりしむあすれまひもゆさうありのし
明和二年出あつりしむ其あつりしむをふりあひのま
みあつりしむの真ゆさうせんまかそまかそまかそ
湯代官過源の御を村とて見せりしむにう孫物
うゆ人のうらじむとまめりつれとあめりしむ先乃
家建並たり何乃あそとまめりしむ孫物とて
これより先乃年よあ水おわらりしむ加富とて
しむゆさう村とて人馬物とまめりしむゆさう
己う又橙た馬うはうとてゆさう徳人のこととけとて
又てむしや結乃役つとむる馬ゆとてまめりしむ

おが屋けれ用をのけりしむかく車ゆらんとて縦十石前
横八石とて七人あまりにまめりしむゆさうとて水
ゆとゆさうとて上よ縦と間横八石の家一縦二石と
六石の家一とてまめりしむ二階りしむゆさうと
よゆさうとて大釜一付をゆさうゆ二付とてゆさう
まめりしむ水乃折ハ草加富あつりしむゆさうとて村と
ぬととてゆさうに満るゆさうとてゆさうとてゆさう
先馬とてゆさうとてゆさうとてゆさうとてゆさう
まめりしむゆさうとて今年もゆさうゆさうゆさうゆ
とゆさうゆさうゆさうゆさうゆさうゆさうゆさう



乃氷とありあふは乃村くすむはよりと東ら次
 きくわうれあつとあひまうしつ屋を氷も退き
 め道と人をもゆりぬるよく父はまうけいとあふを
 たれといよく孫助を志成ひきりかぬ新田に
 とあふを賣民とてりく孫助うたをけとをさゆる
 事かうよ記てか年々園の東水ふくそくまて
 あり是ふあひ賣くは限り八人の門くをそく
 抱え本の教多うりしとあ新田を孫助、助成
 うけあふはゆる事もやまのきされはあふり乃
 村とあひゆりゆる者とあれと孫助うゆひり
 似多くとあふ孫と甚下にをさるる新民はもつ
 孫助、そゆ乃とあ村長あをさうしつん事を
 そいりたふ十人あむかつとをいひてと夫を
 種叔乃料るといひて公はあの中とをせぬるを
 たうと孫助うあ新田といさくかといはるるや
 こは七ほすれり父乃種はあ世成うて孫助あを
 つとくうると居村いりといり苗稼立地をといふあ
 そうにをあう抱るりうて備作やけひら賣民乃
 うらに老たら親もたらあれは孝義をよそのふを
 しては善うと必ま二斗のくといはるる事とあ入に

及よりそおとれまひじりくさあをけく若し色
 たる後よきつらひま後或る米穀雜穀より於
 きて利益とりし事と死らく飯や入るえそれ
 送つつくの事よりらるるわんごく男女よ死
 ら次いともくそえのあまう家じやまじあ
 事とせを貸物をはりりてあわくにつくの
 らくをけり又田のこみくこと死まひるま
 あことあ父控をあつとめりひよそ貸物よ
 知ともつらくひでめらうをを地乃賣物な
 植るあより丸智あはれを細乃利をゆりめ
 皆一人よ六十四所つれをまひ貸物よま
 うれ賣物のほくのひとまら孫物代とあつても
 又ろをまらつてまはよあつらあつ又あ是乃
 以んをまらつて村くの賣物なひよまらつても
 凡二百日依の経日さるる一人よ引りつて
 あえつらつて一日よ百人らあつらあつら
 き日は百二十人よあまらる日あつとせ又
 田を八分あまらつても賣物免つらつて
 孫物よあつらつてこの田をらつらつて
 二あは賣のりまらつて指もあつとり年なれ

二あは賣のりまらつて指もあつとり年なれ
 孫物よあつらつてこの田をらつらつて
 田を八分あまらつても賣物免つらつて
 き日は百二十人よあまらる日あつとせ又
 あえつらつて一日よ百人らあつらあつら
 凡二百日依の経日さるる一人よ引りつて
 以んをまらつて村くの賣物なひよまらつても
 又ろをまらつてまはよあつらあつ又あ是乃
 うれ賣物のほくのひとまら孫物代とあつても
 皆一人よ六十四所つれをまひ貸物よま
 植るあより丸智あはれを細乃利をゆりめ
 知ともつらくひでめらうをを地乃賣物な
 事とせを貸物をはりりてあわくにつくの
 らくをけり又田のこみくこと死まひるま
 あことあ父控をあつとめりひよそ貸物よ
 送つつくの事よりらるるわんごく男女よ死
 きて利益とりし事と死らく飯や入るえそれ
 たる後よきつらひま後或る米穀雜穀より於
 及よりそおとれまひじりくさあをけく若し色



せむくハ夫食のこころも用ぬくよそそ西新
 田乃民よかりとらやうさむさうし下能やうのり
 貢と岩線物カカう毎納く極賣此民共入へ
 後七百又米一斗二升つをかりあへ入を村よとらふ
 とあふあさうれまうし此共まぬふかともいふをも
 あいむさうの利をまこいふさういふさう次あから
 とはへのつしむよも皆い屋さうい屋とあつらふ
 といふあつらふかふさういふと廉あつらふいせ
 といふあつらふさういふ代交は海み多さういふこえな
 といふさういふさう線物銀さういふさういふさういふ
 といふ一代の刀帯する事とせぬく子孫乃志まて
 苗字若菜らせよとら作更さういふ思ぬ思ぬ三
 月乃いさういふ

孝行者之志

与志共と秩父郡前田村の百姓さういふ終よ一斗
 飯と納く母と妻と子供と入念とくお入うさう
 けらるる父ハ長き湯とさういふいふとあよ七十八歳
 て身うせぬとせら鶴膝風を病く十五年う終よ
 らしきさういふとあ志、走ぬまういふ中あく茶月
 といふさういふさういふさういふ耕作よ出さ

も日小ニ二夜ハ必家ニゆりて父母乃女を伺ひ
 暇を史婦のくなくとて死しとあはぬ事久
 しくおとさうしゆりてとろあまう故懐念もつら
 めしあつたさきはぬとせしおするふらくりぬりて
 父とつらこふより伊勢ニ宿せんのおをありて
 果すとあつてゆりて死すは後世のさうりま
 ちふんごをのいけらふりてとろり父は侍あり
 とくまを馬とん記して近里へおとらうともさ
 んをあつた宿てと身よあひする初穂さげ練乃
 奉動らお師の富ありとあつたてとらふと
 暇を華入る果たらしと業苞ふとゆらるる
 ともあひくとのちと逢ふはさこがくつとら
 とふと高つたむと日りてなとあは帰る父母又ま
 みえまはへととく信法乃玉野井沢の女とつ
 きもゆとちれて二十三里のたむと日一夜よとま
 ちたに伊勢よりなりと果又と道とらとれをあつ
 親よゆりてせしは老のうゆらぬとぬらなりと
 けお何半も若くとちうりつとたふちあ
 年のとらり又たけらぬ住者よと父のひら
 まうせく背おひあつた高若をもゆらりて



父をせう後之めくつれ忘るる次まゝくハ白ひまよ
 暮宿しつゝ冥ふい海と、如死形ひさうその後
 母も病老となり、力あるは寝痺まじく自をた
 らめと瘡を忘るさう、病むる乃あけと父、
 時よつとれ半をく、邦年をりこれさうらひ
 け、この年をくおらぬまよいさく、海りくさば、
 さよ朔月の夫食うに絶くたうらうハ身支物
 と子供をたも志しぬ、弟お根もまらぬ、木の葉
 なるくおと海とく糧とすれと母の料をハ常と
 しようれをえりあらぬ、神もまじい、さよおん、

見え次おら、母は七十八歳よされとも程う、病
 して身ハ、み十二歳、長子ハ二十二歳、あくとも、に農事
 を勤く、娘ハ十四歳、末子ハ八歳、いれども、なう、
 ちうら生れつとさうく、親乃孝心をうけつと、あも、と
 己身、貞節に、男、姑、よ、礼を、そ、う、め、ら、半、金、く、と
 右、馬、の、孝、行、の、徳、よ、ら、れ、つ、と、つ、く、入、く、め、ら、う、ま
 け、と、と、ら、貢、り、う、く、乃、夜、を、ま、ら、う、半、を、く
 け、ら、山、中、小、住、り、も、ま、苦、行、つ、ら、く、ふ、れ、ハ、此
 の、由、代、官、校、束、派、を、ま、れ、う、は、め、り、あ、く、と、ま、ら
 ず、恨、も、と、と、く、と、福、よ、く、ま、官、政、え、の、ら、母、の

年なりし

忠義者名

兵助と云ふ郡の某者乃百姓と云ふ男也
 二十八日ある日父の事平次也と云ふ
 甲午限りと云ふくをせしむる限り満くと
 平次つと云ふ我妻久しく病くありしと云ふ
 こと止りしと云ふを伺ふと云ふと云ふは人てま
 女と云ふつと云ふ程よと云ふ決りしと云ふ
 て先づつと云ふと云ふ程よと云ふ決りしと云ふ
 決りしと云ふと云ふ程よと云ふ決りしと云ふ
 万歳と云ふと云ふ程よと云ふ決りしと云ふ
 よ次つと云ふ人におうと云ふ程よと云ふ決りしと云ふ
 たりと云ふと云ふ程よと云ふ決りしと云ふ
 て今つと云ふと云ふ程よと云ふ決りしと云ふ
 借金取つと云ふと云ふ程よと云ふ決りしと云ふ
 身をつと云ふと云ふ程よと云ふ決りしと云ふ
 可成ると云ふと云ふ程よと云ふ決りしと云ふ
 とも皆人と云ふと云ふ程よと云ふ決りしと云ふ
 亡まると云ふと云ふ程よと云ふ決りしと云ふ
 一と云ふと云ふ程よと云ふ決りしと云ふ

といふあまのさき月根の思原らたされしと一旦はあを
 預甲の乃まのい高ひしてみまのりく志をれあも
 後をこころいさふまをかくりもてかくひ終くと情を
 西たうこひをれとつねよ去物う苦実るるにうの親
 族もさふうけつとてう後川のゆとす折まうせう
 さあま助の方飛をまうしす又ああるあうり
 けて本れあうさ情をうううは語うかく世を結ん
 きものもいさげふとせと敷乃無奈と只同をく
 乃心うううとまあふに親とたれ人くそ
 誠と感一年候とていさふうううく思原ら
 物をさう高ふあまをさうううく思原ら人くそ
 ひあひらた又とれあうり人くうの借部くと
 も始のうに親とらたれとても年候とたう或
 て思原らう及て思原らとまえげとて孝の借部う
 借部うといさううもあふさうの方飛う乃乃為
 あまのあ人くそて思原らとてうくそあまは
 思原ら今まうくれとてうまをけくはあまううの方飛
 每九年あまうう思原ら十七年あまうう思原らとぬ六
 う程らあまうてれとてうううあまをう乃とてう
 まく此人思原らとて後う思原らとてううう

半もさうと云助はうとさういふもくを教と
たうきとあう人會成とくち二便の半もて人乃
子とが成身をとすもむをさうてつ入けれを
母親族をさうひさく後とさうと云助、あう、後
こまやうり、経りて今より後とすよ、時とさうけ
よかると念ひよひをさうか、あけ幕をも、お、か
か、お、さう、お、納め、お、祖の志、目くに、つ、か、ま、く
か、何、ち、う、さ、あ、と、半、あ、り、て、あ、う、う、墓、福、て
香、花、を、も、子、向、つ、か、万、能、も、今、は、と、平、次、を、改、ま、く
も、や、十、八、年、も、と、さ、う、け、れ、を、云、助、親、族、ふ、と、り
白くさ岩のまを馬としつもの娘を妻よ、さう人
さ、せ、け、ら、り、志、さ、う、ら、な、く、失、せ、あ、う、と、後、と、さ、あ
さ、う、子、の、お、娘、を、送、り、つ、つ、と、さ、う、一、人、あ、り、く
家、と、後、を、借、得、し、もの、も、金、二、百、八、十、の、銀、百、の、後
甲、の、貴、文、あ、ま、う、り、後、ひ、を、券、と、さ、う、か、て、主、の、牌
茶、の、子、向、く、お、娘、を、焼、換、り、又、年、後、は、と、さ、う、と、初
日、を、及、い、け、も、さ、う、さ、う、り、あ、う、り、に、あ、う、年、の、お、の
向、金、を、お、娘、を、金、を、次、年、と、さ、う、り、お、娘、と、離、れ、し、
て、う、お、娘、を、さ、う、さ、う、り、お、娘、を、さ、う、さ、う、り、あ、え
ま、わ、り、と、さ、う、か、り、と、さ、う、り、と、さ、う、り、と、さ、う、り、と、さ、う、り

半もさうと云助はうとさういふもくを教と

たうきとあう人會成とくち二便の半もて人乃

らまれを拾ひて貯へを死ぬを助弔とてしりせきく
 起るを爰乃てしりてきて掃除とてさく家の内私
 りれを起し林檎小燈火をさけけりまの處れ安
 全とて祈りしりかゆやま助とて又の處を續へり
 けりとのの娘雅とてしりかゆかゆを及骨は權り
 一節よま事次と助あつてハ親族あつてま物ハ
 別ををあへん志とてしりかゆ志めんといひり
 をあへん安居といひま物とてしりかゆけりし
 とくあへん忠節とてしりかゆとて事次ま物と親
 の思ふも清くあつてしりかゆといひは忠臣代友
 淺忠彦四節といふま物とてしりかゆ寛政四年七月
 御褒美の報とてしりかゆとて揚り記

孝女志勲六

足立郡鴻巣宿共百姓勲六とてしりかゆ八十二歳
 の母と娘一人拾りしりかゆめ十九歳乃て後父ある
 一宿あるとてしりかゆの娘を娶り田地九俵
 あつてのに母をさへせんとて家をつくるに絶つた
 して勲六娘を養ふとてしりかゆとてしりかゆけり
 七年しりかゆとてしりかゆを養ふその後二人申して
 けりといふかやとてしりかゆとてしりかゆとてしりかゆ



不多く此費とたう一次費又向つてくまうゆれ
 田畑とも皆先ひきつてあ火災よこへあひくぬつ
 くは半つゆを次つてやれ家をとうりて母と娘とを
 合せ事二人住とてかう日く古れ後物ある、鶏卵
 ちうと高ひくあう那ら價を得く世に成りてうぬ
 されと娘を教りてとれく、母乃喜ひひを住ま
 事多くとてく四五年とありとて此江戸よなとせを
 今、母とこのとあつてもと高ひくううかてうぬ
 飯を個くす、此直飯のよふ入まてなくとれとて
 母の氣色を伺ひく、高ひくうぬ、母も自らあつても
 海よりあつらう、うぬも利をふき、日くおぬとれと
 かしうく、おぬおぬ分あれ、と日のすれ、まひの安く
 か、このおぬ悦も、寺指せぬ、か、とり入、うぬとて
 と、あつてもとて、ま、おぬ、屋へ、つ、と、ま、うぬ、ゆれ
 て湯とむ、を村乃用、と、や、じ、事、と、ゆ、え、して、うら
 和、う、お、ぬ、と、ま、お、ぬ、七、を、ね、く、お、ぬ、ち、う、を、ま
 ぬ、う、胡、う、の、ま、く、ゆ、せ、い、ま、う、う、ま、り、く、お、ぬ、に、ゆ、ぬ
 食、物、を、な、ま、と、ま、ま、の、ま、う、つ、と、た、る、を、ま、あ、つ、う、と
 一、お、ぬ、ま、う、お、ぬ、う、の、申、病、を、や、う、お、ぬ、と、の、れ、い、
 麦飯の中に菜大根芋やうれ、のを、つ、と、く、食、く

本草綱目卷六

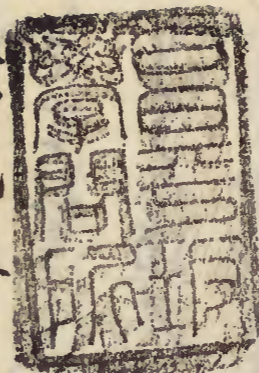
四十二

母は及米の事と食せ又ぬり給ふ所ハさうあて
 後先つらうあらぬ品あらハ母此ハ小叶とんと思ふ
 と及銀難をいつく次求あて人知又かう録とて
 うれ味む乃ああれハさうと母よりさうかへり
 ぬさうふよ去年より高様より日取枕よつて
 くらうかれハ食物とハじとのあをせりまうして花
 ふみ舟の事ふれと幼いむとやとんせとさうとに
 といむく看病せしう日ハ此高ハと休とてさ
 とれたまひもるのあむきとせられ幼七を料と金
 してさしむらうのまらやうりぬ抱ハけり
 公易ハ思むハハ高ハさうとんとも早ハ海
 英吾をさしとあれハ夜起をせとあて候してさ
 とさうり今は夜起をさふかてうけとさ甄を
 けりさうりあ二便さとりと夜後乃あてとさ
 夜もくもあてハさうりさぬハさうり
 娘とも看病の事とんよはび人知ハけれとさ
 のあ様とあ米乃價さうく母子此食物た小姓
 うれれとと人よさうら母の心きハもさうり
 うれとく娘よハつあさうり又さう此高の肉
 火とあつて幼七ハ家もとさうりあてり金

家賊とぞ乳母に告げし母乃ち枕よりありけり
 ありけり人くかき危きよのそとあなご家賊と
 も持て給ふとつて此れはまじ母はありけり
 心色よも母のゆゑに火をきさげし後よ母
 をおいてんとてつておふ風の烈しきり
 伴ひつてありけり老れ母にありけりも是れ非
 火のせまり追付くと待たるおとつてさるに
 うけつてつてつてつてつてつてつてつてつて
 きりよ又そのつてつてつてつてつてつてつて
 垢つてつてつてつてつてつてつてつてつて

對しては母子成つて人頭を上げまゝ省のりつ
 ことせらる人にとつてつてつてつてつてつて
 まゝ道乃ちまゝこよ新あひつてつてつてつて
 ありてつてつてつてつてつてつてつてつて
 交りまふ睦くありつてつてつてつてつてつて
 ぞおつてつてつてつてつてつてつてつてつて
 莫乃ち銀賜りし母より老れ母の扶けつてつて
 けるつてつてつてつてつてつてつてつてつて
 法代官ハ濱岡彦四郎とつてつてつてつてつて

二
三



考義錄卷之六

